臨床研究に関する情報公開

2018 年 1 月から 2023 年 3 月までに血栓回収を受けられた方およびそのご家族の方へ

当院では、以下の臨床研究を実施しております。この研究は、これまでの治療のカルテ情報から得られたデータをまとめるものです。このような研究は、厚生労働省の『倫理研究に関する倫理指針』の規定により、対象となる患者さんのお一人ずつから直接同意を得るのではなく、研究内容の情報を公開する事が必要とされています。
この案内をお読みになり、ご自身またはご家族がこの研究の対象者に該当すると思われる方で、ご質問のある場合、またはこの研究に自分の情報を使ってほしくないとお思いになりましたら、遠慮なく下記の担当者までご連絡ください。

【研究課題】
当院における診療放射線技師の脳血管内治療介助への取り組み

【研究責任者】
診療放射線科　足立　一馬

【共同研究者】
なし

【研究期間】
倫理委員会審査承認後から 令和 5 年 12 月

【研究目的】
２０２１年の診療放射線技師法の一部改正で「良質かつ適切な医療を効率的に提供する体制の確保を推進」「タスクシフト／シェアを推進し医師の負担を軽減しつつ、医療関係職種がより専門性を生かせるよう各職種の業務範囲の拡大」とされ、厚生労働省から新たな業務範囲の見直しに伴う告示研修の受講が義務付けられた。タスクシフトの一環として、当院ではこれまで手術室看護師が行っていた脳血管内手術の介助を診療放射線技師が行うこととなった。診療放射線技師が介助するにあたり、清潔野操作や助手としての動きや注意点、各種ディバイスの preparation 方法などこれまで放射線技師が行ってこなかった分野について学んだ。これらの内容を含んだ、脳血管内手術介助の手技をマニュアル化し、介助することのできる技師を複数人にするための教育を開始した。新規ディバイスのハンズオンセミナーにも医師とともに参加す

ることでディバイスへの知識を深めている。診療放射線技師が介助するメリットは、血管撮影装置操作を技師が行うことができ、その間に医師が他の作業を行うことができるという点があげられる。看護師から放射線技師へ業務移行がスムーズに行われた例として、AIS 症例における、技師が介助する前後の Door to Picture、Picture to Puncture、Puncture to Recanalization time が Mann-Whitney‘s U test で中央値に有意差はなく、スムーズな手技を継続することができている結果となっている。今回はこれらの当院における取り組みを、介助開始から 1 年半ほど経過したので詳しく報告する。

【研究方法】
2018 年 1 月から 2023 年 3 月までに当院にて血栓回収を実施した 32 例を対象に、Door to picture、picture to Puncture、Door to Puncture、Puncture to Recanalization、Door to Recanalization time を診療放射線技師が介助する前後で差が出ていないか検討する。

【研究対象】
期間中に血栓回収を行った 32 例

【研究に用いる試料や情報】
カルテ情報（術中看護記録、手術台帳）

【個人情報保護】
この臨床研究の計画や方法については、ご希望に応じてご自身の資料の要求または閲覧ができます。ご自身の研究結果を知りたいと希望される場合は、他の研究対象者に不利益が及ばない範囲内で結果をお伝えします。希望された資料が他の研究対象者の個人情報を含む場合には、資料の提供または閲覧はできません。研究に利用する患者様の個人情報は患者様個人を特定できる情報を削除して管理いたします。

【問い合わせ先】
〒006-0805　札幌市手稲区新発寒 5 条 6 丁目 2 番 1 号
札幌秀友会病院　診療放射線科　足立　一馬

連絡先：(011)685-3333 (内線 130)